阿南市（あなん）（徳島県）

光のまち・野球のまち・歴史と自然のまち 県南中核都市が目指す近未来のまちづくり

LED産業がけん引する《光のまち阿南》

徳島県の南東部にあって四国最東端に位置する阿南市は、１９５８年（昭和33年）に市制施行し、２０１８年に市制60周年の節目を迎えた。

その間の２００６年には、隣接する那賀川町、羽ノ浦町との合併により、県都・徳島市に次ぐ人口規模（２０１８年末現在の推計人口は約７万１千人）を有する新生・阿南市として再スタートした。

現在では隣接する那賀町、美波町をはじめ、牟岐町（むぎちょう）、海陽町を含めた県南４町との連携による定住自立圏の中心市として、圏域の文化ならびに経済のけん引役を果たしている。

とりわけ経済面においては、人口１人当たりの所得が徳島県内トップを２００９年度から維持しており（徳島県発表のデータは２０１５年度が最新版）、シンクタンクなどの予測では、その座は当分揺らぎそうにないと目されている。

「それは一つには、本市がＬＥＤ製造のパイオニアであり、かつ今も世界をリードする企業として知られる日亜化学工業（株）をはじめ、ＬＥＤの関連企業が数多く立地していることに起因しています。また、王子製紙（株）富岡工場や新日本電工（株）徳島工場、さらには三つの火力発電所なども立地しており、就業環境としては、かなりの高水準にあると自負しています」

そう語る岩浅嘉仁・阿南市長は、２００３年に市長就任後、２００６年の合併を挟んで、現在４期目の後半に差し掛かっている。

「今でこそ本市は県内一の市民所得を誇っていますが、市制施行した60年前は財政再建団体だったのです。それが県南の中核都市へと発展した背景には、企業誘致に懸命に力を注いできたことに加え、当時の市の職員も自ら徹底的な節約に励むなど、財政健全化に向けて地道な努力を積み重ねてきた歴史があります」

先人のそうした努力に培われた土壌の上に展開される、阿南市の現在のまちづくりは、《光のまち阿南》《野球のまち阿南》の全国発信が象徴するように、創意と工夫に満ちている。

「《光のまち阿南》としての歴史は、阿南市生まれの地元企業・日亜化学工業（株）が高

岩浅嘉仁（いわさよしひと）
阿南市長

牛岐城趾公園のクリスマス・イルミネーションとオブジェ

輝度青色ＬＥＤの開発に世界で初めて成功した１９９３年から始まりました。

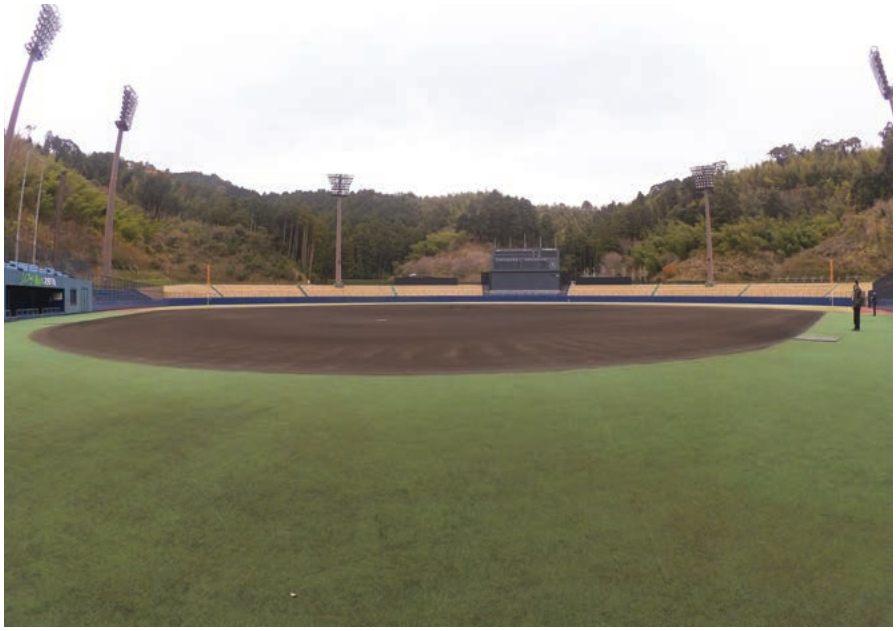
《光のまち阿南》は本市のシティプロモーションの支柱です。国際的な評価をいただいている業種の企業が立地しているからこその、本市ならではのキャッチフレーズであり、聞いた人・見た人の多くは、この《光のまち阿南》をＬＥＤ産業発祥の地と結び付け、連想してくださるのではないでしょうか」（岩浅市長）

市役所庁舎の横を流れる一級河川・桑野川

折しも取材日（２０１８年12月20日）はクリスマスシーズン直前。市役所からも程近く、中心市街地や市役所横を流れる一級河川・桑野川を見下ろす小高い丘「牛岐（うしき）城趾公園」やＪＲ阿南駅周辺では、幻想的なＬＥＤオブジェが来訪者を静かに、華麗に迎えていた。

この時期にはまた、全国各地でＬＥＤを駆使したイルミネーションイベントが開催されており、その数は観光客に人気のイベントだけで計７００以上もあることが、インターネットのイベント紹介サイトなどで確認できる。しかし、ＬＥＤ産業の発祥地で見るイルミネーション・オブジェは、また格別の風格があった。

「《光のまち阿南》と並んで、本市のシティプロモーションを支えるキャッチフレーズに《野球のまち阿南》があります。阿南市は


LEDの電光掲示板が人気の「ＪＡアグリあなんスタジアム」

食べ物がおいしく、アカウミガメが毎年産卵のため上陸するほど自然豊かなまちです。四国八十八箇所を巡る遍路道『太龍寺道』（市内水井町）の近くでは、平成25年1月に新種のカタツムリ（アナンムシオイガイ）が発見されるなど、生物多様性にも満ちています。

産業も振興していますし、古墳時代のものとしては全国唯一となる辰砂（銅鐸などにも使用された希少な赤の塗料）の貴重な採掘遺跡・若杉山遺跡をはじめ、歴史的遺構にも事欠きません。そうした地域資源の一つ一つの平均点がとても高く、非常に見どころの多いまちと自負しています。

その半面、全国的な知名度という意味ではもう一つ、誰もが知っているというようなインパクトのある名所・旧跡が少ないのが悩みの種でした。そこで私が着目したのが、野球を中心に据えたスポーツツーリズムだったのです」（岩浅市長）

新たな観光コンテンツとしての《野球のまち阿南》

《野球のまち阿南》の全国発信はかくして、合併翌年の２００７年から開始された。２０１０年には、その担当課として産業部の中に「野球のまち推進課」も設置された。

阿南市にはもともとアマチュア野球チームが多く、「野球好き」の土地柄であった。高校野球のヒーローから巨人軍に入団し、一時代を築いた水野雄仁氏をはじめ、幾多の有力選手をプロアマの野球界に輩出してきた歴史もある。

それだけではない。阿南市には、60歳代・70歳代以上のシニアチームの存在も珍しくない。野球およびスポーツ全般を根強く愛する地域性が存在するのだ。

「野球は70歳だろうが80歳だろうが、年齢相応にそれぞれ楽しめるスポーツなんです。そして野球愛好者は皆さん、スタンドがきちんとあって、電光掲示板もあって、常にグラウンド整備がなされているような本格的なスタジアムで野球をしたいという願望がある。そこで市内にＬＥＤの電光掲示板を備えた《ＪＡアグリあなんスタジアム》を整備し、野球と観光をセットにした〝野球観光ツアー〟を実施したところ、かなりの反響を得ることができました」（岩浅市長）

野球のまち推進課によれば、野球観光ツアーには、県内外から老若男女のチームが多数参加し、週末には1チーム当たり20人以上が訪れ、市内の野球チームとの試合や観光などを楽しんでいくという。

観光客に大人気！　狛犬も猫の「お松大権現」

野球に関連して阿南市を訪れる人は毎年3千人～5千人を数え、その人たちが市内の宿泊施設を利用する。その主な受け皿になっているのが、市内に立地するビジネスホテルやシティホテルだ。これらのホテルは主に平日、LED産業をはじめとする各種産業の関係者が盛んに利用するが、そのビジネス客が手薄になる週末に野球のツアー客などが宿泊するのだから、経済効果も大きい。

そして、合併翌年に始まった《野球のまち阿南》の取組は、合併後の市民の一体化にも大きな効果を発揮したことだろう。野球を愛好する地域性があり、かつ世代別のリーグ戦なども活発に実施されている土地柄にあって、地域の人たちが一緒に試合をし、汗を流し合った後に交歓し、スタンドで見守る市民もみんなで応援合戦する。

こうしたスポーツを通じて醸成される市民の一体感は、《野球のまち阿南》として「わがまち阿南」が全国発信され、それに呼応して全国から阿南を目指してやってくる同好の士（野球好き・スポーツ好き）との交流によって、さらに倍加したに違いない。

合併時に約7万8千人だった人口はその後、漸減を続け、現時点では約7万1千人となっている。人口減少は一部の大都市部を除いた全国共通の現象であり、いわば不可避の現象でもある。この難局に際し、阿南市では人口減少の抑制に向け、《光のまち阿南》や《野球のまち阿南》の全国発信および、豊かな自然環境や歴史的遺構を活用した《歴史と自然のまち阿南》の発信なども加えた、交流人口の拡大を期す多彩なシティプロモーションを実施し、成功させている。

同時に働き盛り・子育て世代の定住化を促進するため、「しあわせ阿南２０２０（ニィマルニィマル）」と銘打った「第5次阿南市総合計画」に基づく、各種の子育て支援策（第2子の保育料無料化、18歳までの医療費助成など）、雇用環境のさらなる改善促進なども図っている。この雇用環境の改善促進という意味で注目されるのが、《あなんスマート・ワークオフィス》（2018年設置）の存在だ。

新しい働き方を発信する「あなんスマート・ワークオフィス」

地域の働き方改革を促すサテライトオフィス

《あなんスマート・ワークオフィス》は一般的には、シェアオフィスとコワーキングオフィスを兼ねたサテライトスタジオといえる。ワーキングスペースや打ち合わせスペースなどが設けられ、利用者は固定したデスクなどは持たず、仕事の必要に応じた形で自在に施設を利用していく。

しかもその利用対象は、あらかじめ起業をして日の浅い人や、既に業種を決めているも

室戸阿南海岸国定公園の白眉・蒲生田岬

日経ニューオフィス賞に輝く新市庁舎（筍の里・阿南恒例の活竹祭も開催）

のの起業を模索している人など、東京などでもよく見られる既存のシェアオフィス、コワーキングオフィスの利用者像だけにとどまらない。

阿南市では、業種もまだ決まっていないが在宅で働きたいという人のために、産経新聞社を中心に構築された、地方創生雇用創出プロジェクトの《プロライター育成講座》の制度も導入。在宅仕事を希望する主婦などを中心に一般市民が参加し、既に仕事が発生している事例もあるという。

「《あなんスマート・ワークオフィス》の設置には、いくつかの目的があります。まず一つは、大都市圏などから住環境・自然環境共にのびやかな 本市に来ていただき、さまざまな支援を受けつつ、地域経済の振興の一翼を担っていただきたいということ。さらには従来の雇用環境とは違う、サテライトオフィスを活用した自由度の高い新しい働き方（生き方）を、身をもって発信していただくことで、在宅の市民の労働意欲を喚起する効果も出てくるでしょう。プロライター育成講座に参加する方々は、まさにそうした流れを今後生み出す予備軍ともいえます」（岩浅市長）

さらに「地域の働き方改革の新たな拠点」として、「本市の新たな魅力発信基地の拠点としても期待したい」と続ける岩浅市長。

阿南市ではかねてより、「阿南に住む幸せを次世代へ」という理念の下、その新たな環境づくりとして「阿南市中小企業振興基本条例」を制定したり、女性が安心して働ける環境整備を目的に「テレワーク推進センター」を開設するなど、多角的な取り組みを行ってきた。

さらに数年後には、プロライター育成講座で腕を磨いた市民ライターが、自宅とサテライトオフィスを自在に行き来しながら、それこそ「スマートな働き方」を、身をもって実現してくれるのではないだろうか。そんな循環が生まれれば、それはそのまま「阿南に住む幸せ」を、地域の次世代だけでなく、全国の次世代に発信する結果をもたらすことになるかもしれない。

回復期・慢性期の患者もケアする医療センターの開院

岩浅市長は阿南市長に就任する前に、県議会議員や衆議院議員を歴任し、現在に至っている。そうした経歴を通して、岩浅市長が今改めて思うのは「基礎自治体としての市町村の重要性」だという。

「市町村は何といっても、市民・国民と一番距離が近い行政です。当然のことながら、職員も大変だし、市町村長も大変です。市民・国民の要望や苦情なども直接ぶつけられる存在だからです。

一方では市民・国民の喜びも一緒に体験し、分かち合うことのできる存在です。にもかかわらず、しばしば、市町村のやって

いることは末端行政だといわれる。大いに不満ですね（笑）。

末端行政では断じてない。市民・国民（主権者）の生活と一番密着した先端行政を担っているのが、市町村なんです。そういう意味では、地方創生という言葉もおかしい。末端行政という場合に国が中心で市町村が末端だという論法と同じように、地方創生という言い方は中央と地方という上下関係に聞こえる。言うなれば地域創生でしょう。地域がそれぞれの環境に応じた、自らの課題を独自の方法で解決し、克服していこうとする行為が地域創生だと考えています。これはまぁ、あまり大声では言えませんが、そういう意味で私は、政治家としては生来の道州制論者です（笑）」（岩浅市長）

5月に開院される建設中の「阿南医療センター」（工事現場ドローン写真　平成31・2・1撮影）

そのような観点も踏まえて、岩浅市長は4期目に入った2015年以降、まちづくりのテーマを「《医・職・住》の充実化に絞りました」と明言する。

実際、昔からいわれる《衣・食・住》になぞらえた《医・職・住》の拡充こそが、人口減少が常態になりつつある地方都市の「生きる道」であり、ひいては日本全体の行く末を左右していくということだろう。

「医療が充実し、働く環境が整い、快適な住環境が備わっていれば地方のまちほど暮らしやすい場所はありません。そういう意味で本市とその周辺地域は、手前みそになりますが、働き盛り世代・子育て世代が定住するにはぴったりと自負しています」（岩浅市長）

阿南医療センターに隣接する「阿南健康づくりセンター」

近年、行政関係者の間で大きな話題になった書籍『生き心地の良い町―この自殺率の低さには理由がある―』において、著者の岡檀氏（和歌山県立医科大学保健看護学部講師・健康マネジメント研究者）は、阿南市と同じ海岸線沿いにある旧海部町（現海陽町）をその舞台として取り上げた。

「海部町には古来の海のエキス、山のエキス、先祖伝来の生活の教えが息づいていて、それが精神衛生の上で非常な落ち着きと安定感をもたらしているという趣旨なのですが、それと同質のものは、海続きの本市と周辺地域にもあるのです」（岩浅市長）

今年5月には県南部圏域の中核医療機関である旧阿南医師会中央病院（阿南市医師会）と阿南共栄病院（JA徳島厚生連）を統合した地域医療の新たな拠点として「阿南医療センター（22診療科・398床）」が開院する。同センターでは急性期の患者だけでなく、地方の基幹病院ではまれな回復期・慢性期の患者への手厚い医療体制も整備されている。《医・職・住》の中で最も懸案になっていた《医》の充実をさらに得て、阿南市の「生き心地」はより充実する。

（取材・文＝遠藤 隆／取材日 2018年12月20日）